

活用から考えた学修成果の可視化

7つのポイント まとめ

可視化しておしまい学修成果の可視化から脱却するためのポイントを7つにまとめた。リフレクションは学生だけに求められるものではない。大学自身の教育施策の振り返りと不断の改革改善こそが、この市場縮小期における大学の持続可能性を高める術ではないか。



これまで

これから

1 目的

可視化そのものが目的

大学の課題解決に活用する

可視化は、それをさまざまな大学の課題解決に役立ててこそ意味がある。使う目的から逆算して、何をどう可視化すべきか検討を。

2 アセスメント・ポリシー

つくっていない

つくったうえで進め、必要に応じてブラッシュアップ

アセスメント・ポリシーは学修成果を何で測るかの見取り図。必要に応じて見直しを。

3 評価手法

大学独自評価だけ、または外部アセスメントだけ

大学独自評価+外部アセスメント

大学の独自評価だけでは客観性に欠け、外部アセスメントだけではDPの達成度は測れない。多面的評価が大切。

4 体制

教務部や一部専任教員のみ

執行部、非常勤含めた全教員、職員、そして学生

今、問われているのは、全学的な学修成果の可視化。執行部、全教職員はもちろん、当事者の学生も含めて教育力を上げる体制づくりを。

5 教学への活用

各教員任せの授業改善にとどまる

授業改善だけでなく、カリキュラム、大学全体の教育改善・向上

大学としての教育改善・向上のPDCAサイクルの一環として、可視化のしくみづくりを。

6 学生への対応

結果を返却するだけ、または返却もなし

結果をフィードバックし、学修行動を振り返らせる

結果のフィードバックはもちろん、学生自身のリフレクションを促すような活用を。

7 情報公表

消極的・必要最低限

積極的に公表し、大学の課題に対する対応も発信

積極的な情報発信と不断の改革こそが、教育カブランドをつくる。